

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*** 東京大学要覧（昭和40、41年度）の東京天文台記事（100周年記念誌資料1-1）**

東京天文台100周年記念誌資料の整理を続けている。アーカイブ室新聞第346号（2010年6月9日）の「東京天文台100周年記念誌作成時の資料—その1—」の、1）東京大学要覧（自昭和40年度 至昭和41年度）（写真1）に掲載された東京天文台に関する事項を書きとどめておきたい。

写真1が東京大学要覧（自昭和40年度 至昭和41年度）の表紙である。この要覧の第2章に関係法令が記されている。

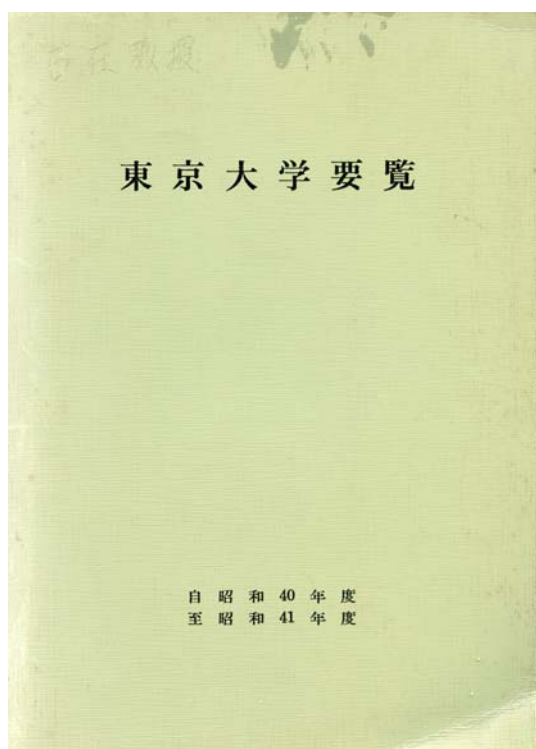


写真1

- 1) 教育基本法
- 2) 学校教育法（抄）
- 3) 学校教育法施行規則（抄）
- 4) 国立学校設置法（抄）
- 5) 国立学校設置法施行令（抄）
- 6) 国立学校設置法施行規則（抄）
- 7) 国立大学の大学院に置く研究科の名称及び課程を定める政令（抄）
- 8) 国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令
- 9) 国立大学の大学附置の研究所の研究部門に関する省令（抄）
- 10) 国立大学の評議会に関する暫定措置を定める規則
- 11) 教育公務員特例法（抄）
- 12) 教育公務員特例法施行令（抄）

13) 学位規則

14) 国立学校特別会計法

この中で、国立学校設置法 第2章 国立大学（名称及び位置等） 第4条 国立大学に、次の表に掲げるとおり、研究所を附置する。とあり、この表の中の9研究所の一つとして、東京天文台の目的が次のように書かれている。

東京天文台：天文学に関する事項の研究及び天象観測並びに暦書編成、中央標準時の決定及び現示並びに時計の検定に関する事務

この第4条の2項に、前項に掲げる研究所のほか、国立大学の教員その他の者で当該研究所の目的たる研究と同一の研究に従事するものに利用させるため、国立大学に、次の表

に掲げるとおり、研究所を附置する、とあり、宇宙線観測所、原子核研究所、物性研究所、海洋研究所、宇宙航空研究所の5つの研究所が共同利用研究所として挙げられている。

この条文が示すように、東京天文台は、この時点では共同利用研究所ではなかったことが分かる。

国立学校設置法施行規則 第1章 国立学校及び国立短期大学 第3節 附置研究所、附属図書館及び附属病院その他の教育研究施設 の(附置研究所の所長) 第9条に、「国立大学の大学附置の研究所(以下「附置研究所」という。)に所長(東京大学に附置する東京天文台にあつては、台長とする。以下同じ。)を置き、その大学の教授をもって充てる。」とあり、東京天文台の長は「台長」と呼ぶことになっている。

また、第3節 附置研究所、附属図書館及び附属病院その他の教育研究施設 の(学部附属の教育研究施設等及びその長) 第20条 第2項に

「第16条第1項に規定するほか、別表第7のとおり、附属研究所附属の研究施設を置く。」とあり、東京天文台に乗鞍コロナ観測所、岡山天体物理観測所、堂平観測所、人工衛星国内計算施設の4つの研究施設が置かれていることになっている。

国立大学の大学附属の研究所の研究部門に関する省令(抄)の、「国立大学の大学附置の研究所に研究部門を、別表第1から別表第19までのとおり置く。」別表5の中に、

東京天文台：天文時、子午線、天体掃索、天体電波、太陽物理、測光、分光、恒星分類、人工天体運動の9部門が置かれている。

これらの部門、附属施設の専任講師以上の職員及び事務長が昭和41年5月日現在で、部門、職、学位、氏名、出身都道府県が掲載されている(写真2)。

○ 東京天文台				
職 員				
(昭和41年5月1日現在)				
台 長	教 授	理学博士	広 瀬 秀 雄	兵 庫
天文時部	教 授	理学博士	虎 尾 正 久	大 阪
同	助教授	理学博士	飯 島 重 孝	山 梨
同	講 師	理学博士	松 波 直 幸	東 京
同	講 師		河 野 節 夫	広 島
子午線部	教 授	理学博士	佐 藤 友 三	青 森
同	助教授	理学博士	安 田 春 雄	宮 崎
同	助教授	理学博士	青 木 信 仰	東 京
天体掃索部	教 授	理学博士	広 瀬 秀 雄	兵 庫
同	教 授(併)	理学博士	坪 川 家 恒	福 井
同	助教授	理学博士	竹 内 端 夫	東 京
同	講 師		下 保 茂	北 海 道
天体電波部	教 授	理学博士	高 倉 達 雄	兵 庫

天体電波部	教授	理学博士	高倉達雄	兵庫
同	助教授	理学博士	赤羽賢司	長野
同	助教授	理学博士	河鯨公昭	東京
同	助教授(併)	理学博士	高瀬文志郎	兵庫
同	講師		土屋淳	大阪
同	講師	理学博士	森本雅樹	東京
太陽物理部	教授	理学博士	長沢進午	東京
同	教授(併)	理学博士	藤田良雄	福井
同	助教授	理学博士	守山史生	大阪
同	講師	理学博士	西恵三	東京
測光部	教授	理学博士	古畑正秋	長野
同	助教授	理学博士	北村正利	高知
同	講師	理学博士	田鍋浩義	山口
同	講師		斉藤馨児	東京
分光部	教授	理学博士	斉藤国治	東京
同	講師	理学博士	牧田貢	東京
恒星分類部	教授	理学博士	大沢清輝	東京
同	教授(併)	理学博士	海野和三郎	山梨
同	教授(併)	理学博士	末元善三郎	兵庫
同	助教授	理学博士	寿岳潤	東京
同	講師		近藤雅之	福岡

人工天体運動部	教授	理学博士	古在由秀	京都
天文計算室	講師		千場達	熊本
乗鞍コロナ観測所				
所長	教授(併)	理学博士	長沢進午	東京
	助教授	理学博士	日江井栄二郎	東京
	講師		大城義名	東京
岡山天体物理観測所				
所長	教授(併)	理学博士	大沢清輝	東京
	助教授		石田五郎	東京
堂平観測所				
所長	教授(併)	理学博士	広瀬秀雄	兵庫
	助教授	理学博士	関口直甫	東京
人工衛星国内計算施設				
施設長	教授(併)	理学博士	古在由秀	京都
	講師		積田寿久	東京
事務長	文部事務官		下村潤二郎	神奈川

写真2

職員に続いて、規則として東京大学東京天文台規則が次のように掲載されている(写真3)。

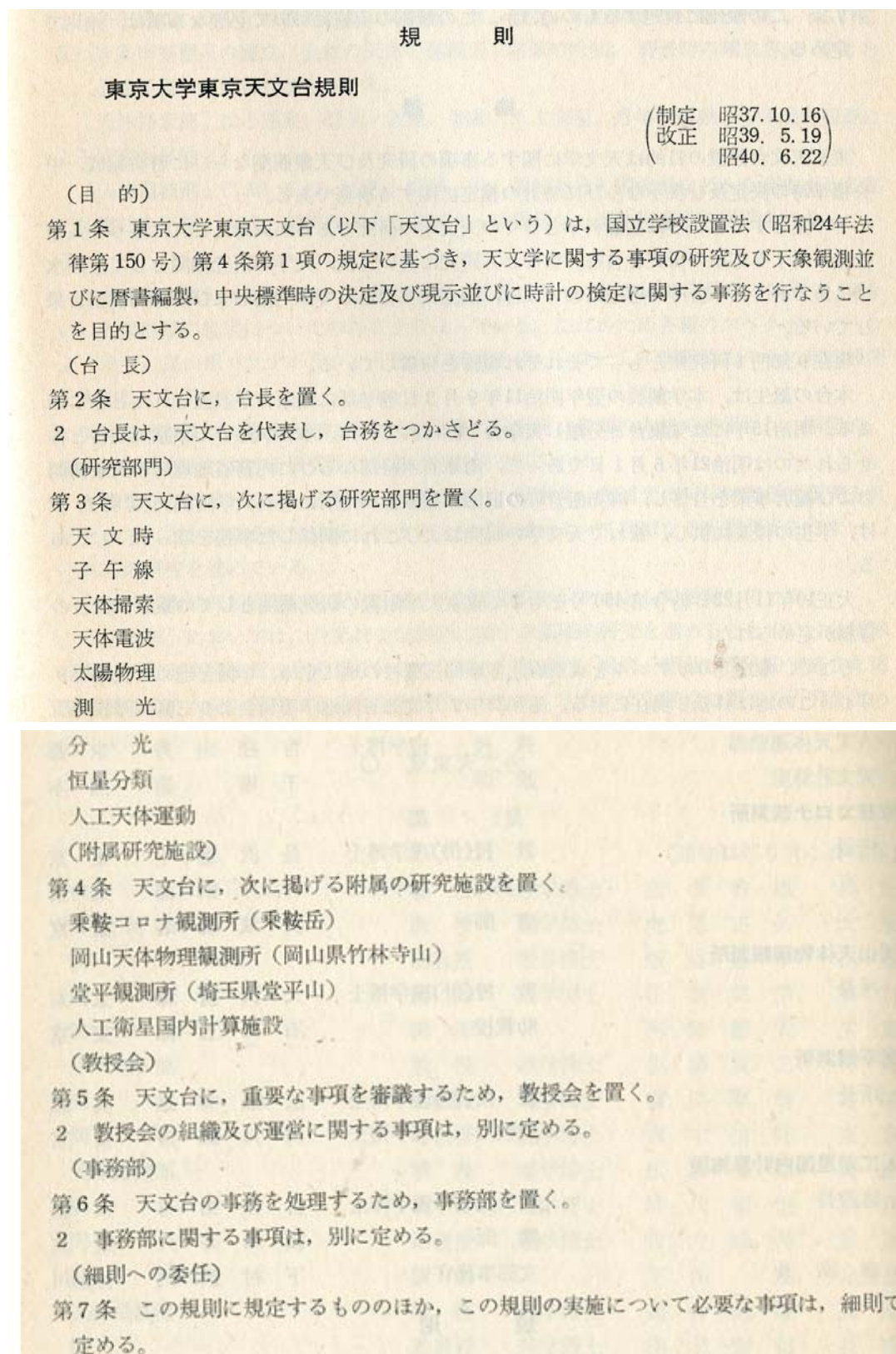


写真3

続いて、摘録として東京天文台設置の目的、歴史などが記載されている（写真4）。

摘 録

東京天文台設置の目的は天文学に関する事項の研究及び天象観測ならびに曆書編成，中央標準時の決定及び現示ならびに時計の検定に関する事務である。

その主とするところは基礎科学としての天文学の研究であるが同時にこれに基づく人類社会に対する応用の研究を含む。すなわち研究においては，大学の研究機関として最高水準にあるべく，一方その応用においては，国立天文台として国内のおよび国際的責務を果している。

現在9部門1研究室をもってそれぞれ職務を分掌している。

本台の誕生は，本学創設の翌年明治11年9月3日理学部に観象台が設置されたときに始まる。明治15年には气象台と分離し天象台と呼ばれていた。本台が始めて東京天文台と称せられたのは明治21年6月1日であって，海軍省水路部ならびに内務省地理局の天象観測および編曆事業を合併し，麻布飯倉町の旧海軍観象台の地所に理科大学附属天文台を設け，学生の授業に供し，兼ねて天文学の研究およびこれに関係した事務を掌ったのである。

大正10年11月23日勅令第450号をもって東京大学附置の研究機関としての東京天文台の官制が定められた。

そこで，敷地3,000アールを東京府北多摩郡三鷹村の地に定め，準備を進め大正13年9月1日この地に移転し現在に至る。昭和23年7月文部省測地学委員会より三鷹国際報時所

の人員及び施設が本台に移管された。また，従来の技官制を教官制にかえ，研究の進展に
応ずることになった。

昭和24年10月長野，岐阜の県境乗鞍摩利支店獄（2,876m）にコロナ観測所を新設した。

また，三鷹構内においては昭和28年以来直径10mの電波望遠鏡を初め諸施設が次々と完備していった。昭和35年10月には岡山県浅口郡鴨方町竹林寺山に口径188cm及び91cmの反射望遠鏡を備えた岡山天体物理観測所を新設した。昭和37年11月には埼玉県比企郡都幾川村堂平山に口径91cm反射望遠鏡を備えた堂平観測所を新設。また，昭和40年4月には人工衛星国内計算施設を三鷹市大沢東京天文台に開設した。

現在「精密天文時」「恒星位置」「小惑星，彗星，衛星」「天体電波」「太陽面現象」「変光星新星」「恒星分光」「人工天体運動」の講座を中核として次のように9研究部1研究室にわかれて研究が進められている。

「天文時部」は国際的に一様な時間系，不変な時量単位の確立を目的とし，写真天頂筒による時刻観測，水晶時計，原子時計による時刻保守，経緯度測定，報時の送受信による国際的時刻及び周波数比較を実施し，我が国の標準時および時量単位を決定している。これにより郵政省の行なう標準周波数報時電波に対し基準を与え，内外報時の修正値を公表している。

「子午線部」は子午線観測によって恒星，月，惑星，小惑星等の位置を決定し，これに基づき基準座標系の確立，上叙の天体の運動天文常数の吟味，曆表時の確立等の研究をし，基準星表の編製を行なっている。

「天体掃索部」は小惑星，彗星，流星，衛星，人工衛星，月等の運動の子午線外観測による研究を目的としている。

「天体電波部」においては、太陽、惑星、月、銀河系内の電波源などから到来する各種天体電波を干渉、分光、偏波などの方法によって観測し、天体物理学的研究を行なっている。

「太陽物理部」においては、太陽の光球、彩層、コロナにおける諸現象の観測を行ない、太陽活動の性状についての研究を行なっている。これがため各種のスペクトロ・ヘリオグラフ、高山用コロナグラフなど特殊な装置を用い、主として国際協力の下に常時観測を実施している。

天体電波部及び太陽物理部で得た太陽活動の諸資料は各種の方法で速報され、国際的、国内的に各方面における研究及び実際の用に供されている。

「測光部」においては、変光星、新星、連星、夜天光、黄道光の天体物理学的研究を目的として、主として各種赤道儀及び夜天光測定器械によって精密なる光電測光を行ない、それらの研究を進めている。

なお、国際地球観測年以來夜光に関する国際資料センターとして活動している。

「分光部」においては、分光および測光に関する基礎的研究を進めるとともに、各種赤道儀に分光写真機または光電管を付して恒星の分光測光、分光分類及び測光を実施また塔望遠鏡により太陽の精密なる分光学的観測を行ない、天体の大気構造に関する研究を進め

ている。

「恒星分類部」においては、恒星の温度、重力、化学組成による分類を行なうため、各種赤道儀を用いて線スペクトル及び連続スペクトルの観測を実施している。

「人工天体運動部」においては、人工天体運動の天体力学的研究人工天体の位置、速度測定を利用しての測地学的研究、天文常数の決定などを行なっている。

「天文計算室」においては、天体の視位置、日月食、掩蔽などの推算を行なうほか、我が国の現行暦の標準として暦象年表を毎年出版している。

以上を総括すると各部はそれぞれの基礎的研究を進めるとともに国家的に必要な業務や国際天文連合を初めとする各種の国際協力研究事業をも並行して行なっている。なお、各種観測の資料および諸研究の成果は、本台出版物すなわち東京天文台年報（欧文）、東京天文台報（邦文）、東京天文台欧文短篇速報、東京天文台太陽面現象報告、東京天文台報時速報、暦象年表、理科年表等により報告されている。

写真 4

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp